

メールレター(55)

小さな秋

小さな秋になりました。空が高くなり、時がゆっくりと過ぎていきます。

テラスの野菜は、雨が酷暑の一夏で、夏の太陽の恵みをきちんと受けて成長できず、不作のまま終わりそうです。トマトも僅か数個、茄子はたった一つ、ピーマンが数個だったでしょうか。美味しかったのはレタスといんげんでした。それだけでも、夕方の食卓を飾ってくれる嬉しい野菜たちでした。

9月はこちらでは学校の新学期です。子供たちは、新しい学習道具を鞆(リュックサックが大半ですが)に入れ、やや緊張しながら学校に通い始めました。コロナ禍で規制があるようですが、子供達は元気一杯です。

ドリトル先生は、手術した右肩はさておき、手術しなかった左肩の痛みをここ2-3ヶ月間訴えていました。先日、コーチゾンの痛み止めを左肩に注射してもらって以来、一挙にリハビリ志向になりました。薬の効果が出るのは7~10日後と言われていたのですが、気が楽になったでしょう、注射直後にリハビリゴムチューブをアマゾンから一箱取り寄せたのです。それをを使って必死で腕の筋肉のリハビリを始めました。ちょっと、ちょっと、気が早いのは。。。。

半年以上、痛みで動かない月日が続き、筋肉は腕のみならず、足腰や全般に落ちてしまっていたようです。今度は背中が突然の活性化に絶えず悲鳴をあげ、痛み始めてしまいました。フランス人はどうやら、駈け出さないと考えがまとまらないのか、慌てて背中をさすりながら、リハビリの量を調節し始めました。あちこちの調節をとりながら、筋肉がつき始めるにはもう少し辛抱がいるようです。

マダム田中はドリトル先生の痛みや気まぐれに振り回されながらも、地道にボツボツといけばなのお稽古を続けております。お稽古が何よりの気分転換かもしれません。家人の世話に追われながらも、いけばなインターナショナルのモンリオール支部プレジデントをまた1年間一引き受けることになり、新期の活動の準備に追われております。第一回目の主要運営委員のミーティングでは意見の食い違いから、2人の女性(だいぶとうが立っておりますが)が取っ組み合いの喧嘩になりそうでした。日頃おとなしい人が切れるとこうなるのかと、あらーっと慌ててふためいた瞬間でした。結局、決断は全てマダム田中がとるということで一段落しましたが、欧米の女性のヒステリーは半端ではありません。日頃大人しかろうが日頃から激しくけなす人であろうが、湯気を立てて怒るとまあ、手に負えません。この後は、これが案外、彼女たちは合理的で根に持たず、あっけらかんとしているので、御し易いのです。まあ何とかなるでしょう。

こうした日々ですが、週末になると娘の家でお茶を飲んで孫と遊んだり、義理の長男が奥さんや次女(生後4ヶ月)とお茶を飲みにきたりと、適度な家族の交流で時が過ぎていきます。義理の長男は、8月半ばにポルトガルで1週間バカンスを過ごしてきましたが、2週間後にローマにまた旅にでるとのことでした。毎回、両方の国の出国、入国の際にPCR検査を受けることにはなるのですが、さほど苦痛でもないらしく、楽しそうに出かけていきます。ということは、マダム田中は、又、義理の長男の猫シッターということなののでしょうか。というわけで、毎月、この猫は、マダム田中の家に猫バカンスを過ごしにやってきます。この猫がどうしようもないほどドジ猫で、階段に寝込んでまどろみ、高い所からどさっと良く落ちるのです。足腰をその度に痛め、ひやひやしています。猫バカンスも気を使います。お預かりも楽ではありません。

家族や夫婦も高齢になると寄り添って暮らしていくようになりますが、お稽古にやってくる生徒の1人は、来るたびにフットとため息をついています。お稽古中も鳴り止まない携帯は、ご主人からの電話です。決してラブコールではありません。一種の妻依存症(こんな表現があるかどうかは知りませんが)で、お皿一枚動かすにも奥さんに相談してから。。そんな感じです。ノーベル賞以外は世界中の表彰状や賞は手にしている世界的に高名な医学研究者ですが、日常生活は奥さんにいつもそばにいてもらいたい、あいつちをうってもらいたい。。それだけが暮らしの基準なようです。

「トイレに入っている間でも軽く20回はよぶのよね。1人の時間とか自由とかはないのよ。」と生徒は笑いながら言っています。朝起きがけは、ご主人に、

「まず良いことだけ言ってみて。メモとっておくから。。。それから悪いこと言ってみて。」愚痴で始まる1日の対処法だそうです。きっとその後も何百回となく色々な理由で、あるいはわけははなくても呼ばれるのでしょう。若い時の交通事故で痛めた背骨が年齢を重ねると共にあちこちに障害を出し始め、歩くこともままならないほどなようです。当然愚痴も増えます。聞き流すのが日課とか。

それぞれに家のそれぞれの老後の暮らし方があるのかもしれませんが、老いて共に無事に楽しく暮らすのは一種の暮らしのアートかもしれません。